

# 女子大國文

第七十一号  
山崎ゆみ先生追悼号  
令和四年九月発行

女子大國文  
第七十一号

令和四年九月発行

京都女子大学国文学会

## 女子大國文

第七十一号

令和四年九月十五日 印刷  
令和四年九月三十日 発行

〒605-8585 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇五十一五三一九〇七六  
FAX 〇五十一五三一九一二〇  
振替 〇〇〇一五一一三一四

〒605-8585 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇五十四一四一〇八代  
FAX 〇五十四一六二八二二

山崎（正木）ゆみ先生 年譜・著述目録等……………（一）

二〇二二年度公開講座 平安時代の柿本人麿……………藤田洋治（九）

固原漆棺の孝子伝図について（上）……………黒田彰（三二）

『後撰集』伊衡女詠と「長恨歌」……………北條暁子（六〇）

—— 歌句「いづこをはか」とから（下）——

『櫛葉和歌集』所収の句題和歌……………小山順子（九三）

—— 鎌倉時代の句題和歌断章 ——

京都女子大学図書館蔵「能双六」……………川島朋子（二七）

—— 新蔵資料の紹介と小考 ——

長田幹彦『霧』論……………浅井航洋（四九）

谷川俊太郎『なごみ』論……………宮本和歌子（七七）

冰青居蔵品図録（古筆切編）……………池尾和也（九六）

—— 定数歌・歌会歌（二） ——

京都女子大学図書館「方丈記コレクション」……………中前正志（三八）

—— 概要と『方丈記宜春抄』新出写本紹介 ——

彙報……………（三三）

寧夏固原北魏墓漆棺画の孝子伝図……………黒田彰（i）

京都女子大学国文学会

## 彙報

○女子大國文第一七一号をお届けします。今号は、二〇二一年十一月三十日に急逝された山崎ゆみ先生追悼号とし、巻頭に山崎ゆみ先生のお写真・年譜・著述目録等を、彙報欄に追悼文を掲載しました。

○昨年度に続き、二〇二二年度も新型コロナウイルス感染症の關係で学科の行事に影響が出ています。対面実施ではなくオンラインでの実施が中心となりました。以下の行事については、開催形態を検討中です。

公開講座 十一月七日(月)  
○優秀論文発表会(オンライン開催)の卒業論文要旨・体験記、行事に参加しての感想文を掲載しました。

### 研究室だより

○新型コロナウイルス感染症の流行状況を考慮し、優秀論文発表会と新入生歓迎行事は、オンライン(Zoom)にて開催しました。

○小山順子先生が、四月から一年間、国内研修のため京都大学に出ています。

○山中延之先生が、京都大学での国内研修を終えられ、お戻りになられました。今後、研修の成果を授業や御論文においてお示しくださるでしょう。

○中前正志先生が、このたび第一回説話・伝承学会賞を受賞されました。この賞は、「書かれた説話から語られる説話に及ぶ」「広く伝承社会を重視」した、「国際的な視野のもとに、かつフィールドに対する視点を重視する」研究を対象とするものです。中前先生の著書『寺院内外伝承差の原理―縁起通史の試みから―』(法藏館、二〇二二年三月二十四日刊)が受賞の対象となりました。授賞式は、二〇二二年四月二十三日に立命館大学で開催(ハイブリッド方式)された説話・伝承学会二〇二二年度春季大会にて行われました。中前先生に心よりお祝いを申し上げます。

○国文学科卒業生で、大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程修了生の山本真由子氏(大阪公立大学文学研究科准教授)が、このたび第二十三回紫式部学術賞を受賞されました。この賞は、「紫式部と王朝文化に関する優れた研究業績を対象とする」ものです。山本氏の著書『平安朝の序と詩歌―宴集文学攷―』(塙書房、二〇二二年二月二十五日刊)が受賞の対象となりました。授賞式は、二〇二二年五月二十二日に京都ホテルオークラにて行われました。山本氏に心よりお祝いを申し上げます。

す。

○本年度の文学部国文学科長（本年度より名称変更）、および国文学会代表幹事は中前正志先生です。池原陽齊先生、中西俊英先生とともに、国文学科・国文学会の運営に尽力されておられます。

### 二〇二二年度国文学会行事（前期）

○新入生学科ガイダンス

四月六日（水）午前九時より

於 J 201・J 224（クラス毎に分けて実施）

○優秀論文発表会

五月七日（土）午後一時より（オンライン開催）

〈卒業論文〉

萬葉集二六九番歌考

歌枕「塩竈」の変遷

『百人一首』小野小町歌の英訳について

―小町説話と掛詞の訳出を中心に―

変身譚における蛇の姿

―女人化蛇説話を中心に―

新谷 美結氏

梅田 文乃氏

佐野 瑞氏

酒徳 優氏

酒徳 優氏

〈修士論文〉

『我身にたどる姫君』「音羽山」試論

―都を希求する山里の姫君のための舞台― 梶山 柚輝氏

○新入生歓迎行事 能楽鑑賞会

六月十八日（土）午後一時より

・お話（能の歴史について）

・装束着付および実演

・お話（お囃子について）

・楽器紹介および実演

・謡体験

・お話（狂言について）

・狂言『寝音曲』

・仕舞『橋弁慶』

※当日のお手伝いを担当していただいた学会委員の方と運営担当

教員のみ、音楽棟二階演奏ホールにて対面で参加しました。

※対面で参加の学会委員の方には、感想文を次号に寄稿していただきます。

## 追悼 山崎ゆみ先生

大谷 俊太

昨年十一月三十日、われわれ京都女子大学国文学科ならびに国文学会は、掛け替えのない同僚あるいは恩師である山崎ゆみ先生を失いました。コロナウィルス蔓延という死と隣り合わせの日々を長く過ごしてきたにもかかわらず、その訃報には虚を衝かれ、取り返しのつかない厳粛な事実を前に竦然とした、その感覚が今も胸に残っています。

山崎先生は、昨年度、病氣療養のため休職をされていました。そして実は、今年度も休職を続けられることを決めておられました。投与する薬を元に戻しての治療を続けられるためと聞いて、病状の恢復がはかばかしくないことは承知していたつもりです。ですが、そのような中でも、国文学科の来年度の授業計画について折々に、こちらの差配を先取りして適切な助言のメールが送られてきました。その配慮はお元氣な時から変わらぬことで、つい病状にお変わりないのだと思いついていました。後から思えば、メールのやりとりは十一月半ばまで。そして半月後、訃報に驚くことになるのです。

山崎先生は用意周到の人でした。今年度の休職をあらかじめ申

し出られたのは、翌年度の授業計画を考え始める時期に合わせてのことです。われわれに迷惑を掛けまいと段取りを考えられていることでした。そのお蔭で、急逝されるとい痛恨事の後も、学科としては周章して授業計画を見直すなどのこともなく、淡々と滞りなく日常を維持することができたのでした。おそらくは学生の指導においても、その周到ぶりは存分に発揮されていたのでしょう。毎年の山崎ゼミの人氣が何よりそれを証しています。われわれが歩むべき確かな道筋を、声高にはなくいつのまにかいつもわれわれに用意して示される、山崎先生はそのような方でした。それがどれほど有難いことであつたのかを、これから時々思い知ることになるのだと思います。

このことは研究者としての正木ゆみ氏にも当て嵌まります。対象作品について周到に充分な調査・検討を加えた上で、焦点を定め、何のてらいもなくま正面から考証を一步ずつ進めます。読者は、その平坦に見える道筋を辿りつつ着実に新たな見解に導かれます。言うべきことが充分な説得力を持ってけれん味なく毅然と論じられています。やはり、周到な準備あつての余裕のなせるわざなのでしょう。かつ、大阪女子大と大阪大学で土田衛先生・信多純一先生というこれ以上望むべくもない二人の師匠と多くの研究仲間に出会い、その後も演劇研究会で切磋琢磨されるという恵

まれた環境で誠実に研究を行ってこられたことで養われた地方の、なせるわざでもあると察しています。

生きるということは不断に死に近づくことです。近松の心中への道行きがそうであるように、われわれもまた日々死への歩みを続けています。近松のそれが、死へ追い込まれて行く人間の狼狽と覚悟を絡め取ったものであるのなら、山崎先生はそれを冷静に見つめてこられました。人間の弱さと強さに思いを致すことで、周到さと毅然さとを合わせ持たれることになったのではなかったのでしょうか。

論文を読むと山崎先生の姿が甦ってきます。論文も人を表わすのです。論文の中に山崎先生は生きておられる、そこにすくと。

## 正木さん、山崎先生

滝川 幸司

山崎ゆみ先生は、私にとって、第一に先輩、正木ゆみさんでした。大阪大学文学部の国語学国文学研究室（当時）に所属することになった三回生の時、正木さんは、大学院博士前期課程一回生で、近世演劇という、私にとっては縁遠い分野を専門としていらっしやいましたが、研究室内では話をすることが多かったよう

に思います。最初にお話しした内容は記憶の彼方ですが、澁澤龍彦の話題で盛り上がったことは覚えていますが。生協の書籍部で遇って、「最近おもしろい本ある？」と聞かれることも何度かありました。

研究室で開かれる卒業論文・修士論文中間発表会、院生発表会では、学部生、院生を交えて議論がありました。正木さんもよく質問に立たれましたが、言葉は穏やかでも、内実はかなり厳しい質疑をなさっていました。

私にとって親しい先輩のお一人であったのですが、それが一層近しくなったのは、正木さんが結婚されたことによります。正木さんの御夫君、山崎淳さんは、私の一つ上の学年で、もっとも親しい先輩です。私だけではなく、当時の院生、学部生に慕われていたのが淳さんでした。お二人が結婚されるまでの過程をつぶさに見てきました。いろんなエピソードがありますが、一つだけ。ある夕方、同期の海野圭介君（現、国文学研究資料館教授）と阪大坂を下り、いつものように飲みに行こうとして、その頃できたばかりの焼鳥屋「秋吉」に入りました。すると、淳さんが一人で座っていて、我々を見てそわそわし始めました。と、奥から正木さんが出てきたのでした。ちょうどお帰りの時間だったのですが、「見られたくないのなら、こんなところで飲まなければいい

のに……」と、先輩なのに拘わらず微笑ましく思ったものでした。お二人の結婚披露宴でもおもしろいことがありましたが、割愛します。

正木さんが京女に就職されて間もなく、淳さんが二〇〇九年に関東に赴任され、お二人は別居生活に入られました。

二〇一五年、私は京女に異動し、正木さんと同僚となりました。「正木さん」と呼んでいたのですが、「学内では、山崎です」ということで、「山崎さん」「山崎先生」と呼ぶようになりました。

赴任初年度でいきなり一回生一組のアドバイザーとなりました。二組は山崎先生で、右も左も分からなかっただけに大変心強いことでした。とにかく学生に対する気配りというか配慮というか、ほんとに丁寧な学生のことを考えていらっしやるのが伝わり、私のクラスとは随分違うなあと反省頻りでした。

結果的に四年半しか同僚としては一緒にできませんでしたが、会議の席での細かな指摘や、口頭試問での穏やかでありつつ辛辣な評価など、ああ正木さんだなと思うこともしばしばでした。

私が阪大に転出する直前、淳さんが関西に戻ってこられ、お二人は十年ぶりに一緒に過ごされるようになり、本当によかったと心から思いました（私も十年間別居生活でしたから特に）。

二〇二二年十一月に、私や淳さんが所属する大阪大学古代中世

文学研究会で、特別例会としてシンポジウムを開催しました。淳さんや海野君もパネリストとして報告されました。終了後、茶話会的な打ち上げが行われたのですが、淳さんは、いそいそとお帰りになり、私と海野君で、正木さんに会いたいんだな、相変わらずラブラブだななどと話していたのですが、それだけではなかったと分かるのに四週間とかかりませんでした。

十一月三十日、同僚の飯倉洋一さんから正木さんが亡くなったという連絡が入りました。私は何が何だか分からず、坂本信道さんにメールを送ったりしましたが、まったく現実感のないまま過ぎました。正木さんが休職なさっていたことすら知らなかったのです。

十二月三日、お通夜に向かいました。久しぶりに京女の元同僚や事務の方ともお目にかかりました。こんな状況での再会になるとはまったく考えてもいませんでした。淳さんの挨拶で正木さんの病状を知ることができたのですが、私が同僚として過ごした間に手術を受けられていたこともここで初めて知りました。お通夜に出、焼香し、お顔を見ても、それでもまったく信じられないまま帰宅しました。

正直今でもまだ正木さんがいらっしやらないことが信じられません。京女に務めたままであれば、隣の研究室でしたから実感も

湧いたことでしょうか、いまだに現実感のないまま過ごしています。

それにしても、十年ぶりに正木さんと淳さんが同居できるようになって、二年半程度しか経っていないことを考えると、胸が締め付けられます。

この原稿を書きながら正木さんのことを様々に思い出しています。パソコンで付けている日記で、正木さんの名前を検索すると、同僚となってからいろんな相談していたことも分かります。そういえば、TR茶で一緒になったこともありました。

お目にかかれない時期があっても、すぐに、例えば毎年正月に行われる阪大の国語国文学会で、淳さんと一緒に会えるだろうと思えたのですが、でももう、記憶の中でしかお会いすることができません。同僚時代のこと、ついこの間のことのように思うのですが、記憶の中のお姿やお声はぼんやり遠ざかっています。ここまで書いてきて、胸が苦しくなってきました。こういう感覚も時を経て弱まっていくのでしょうか、だからこそ正木さんが残されたものを反芻し、自分が受け継げるものは、たとえ小さくとも受け継いでいきたいと思うのです。せめてそうすることで、お世話になった御恩を返したいと思うのです。

やすらかにお休みください。

## 山崎ゆみ先生を懐う

二〇〇六年度博士前期課程修了 高橋 小百合

月並みな表現ではあるが、その報せはあまりに突然だった。

昨年暮れ、私に届いたのは、ご夫君のお名前で刷られた年賀を辞する旨のお葉書であった。はじめ私は文面を読まなかった。そういう習慣だったのだ。自分の親族以外から送られる喪中葉書は、故人のお名前を読んだところで大抵は誰のことだかわからない。ご夫君のお名前で届いたことも、倉卒の間に刷るものであってみれば不自然とも思わなかった。そうして落手したなりになっていた葉書を、整理する段になってはじめて私は、故人として山崎先生のお名前が書かれていることに気がついた。茫然とするまま懐かしい先生方にご連絡し、お話を伺って、やはりはじめて、山崎先生が闘病しておられたことを知った。

昨年の年頭には変わららずに年賀状を頂戴した。その前も、さらに前もだ。読み返してみても、ご病気をうかがわせる文面も、文字の乱れもない。そういう方であられた。

私の学部時代、山崎先生はおもに短期大学の講義を担当しておられたこともあり、警咳に接する機会がなかった。修士課程に進学して後も、やはりご縁は薄かったが、あるとき私はごく個人

的な悩みを、学外の先生にふと打ち明けた。その先生は「山崎先生に相談しなさい」と言われ、紹介の労をとってくださった。正直なところ私は戸惑った。これまでお話ししたことのない先生に、「悩んでいるのでお助けください」もないではないか。が、はじめて間近くお目にかかった山崎先生は、どうもご面倒をおかけして、としどろもどろに挨拶する私に、そういう気遣いはしないように、と力強くいわれた。これは大学教員としての責務であるからはあなたは気にしなくてよろしい、と、そんな意味のことをおっしゃったように記憶している。

そのとき私は思い出したが、学部の一回生のとき、上古から近代まで、各時代を専門とされる先生方が輪番で概説のようなことをしてくださる講義があった。その近世の回で、山崎先生の講義を受けた。

熱を帯びて前のめりに話されるタイプではなかった。ひたすら独語するように駆けていってしまわれるのでもなかった。学生の反応を見ながらひとつずつ語りかけてくださる、そんな印象をうけた。そうした講義の印象そのままに、目の前の山崎先生は実意の塊であられた。特別に気遣わしげな態度をとられることもなく、耳に心地の良い言葉を次々投げかけられるでもない、だかどうしようもなくお優しいかった。親身というよりは当事者そのもの

で、それがあたりまえのように接してくださった。あの頃たしかに私は苦しかったはずなのに、山崎先生のおいでのなる風景は、思い返せばどれも温かくなつかしい。

追悼文というようなものを私ははじめて書くのだが、だいたいは最後は亡くなられた方に何かを誓ったり、思い出として区切りをつけたり、以て故人の瞑するようなおだやかな言葉で締めくくるのが常道であろう。しかし私にとって山崎先生を喪ったことはまだなまな傷でありすぎる。みたまの安らかならんことを祈る気持はもちろんあるが、誰かの死をうけいれること、受容とはすなわち諦めであろう。諦めなければいけないこととわかっていても、私はまだ悔しい。切ない。苦しい。こういうことを書くべき場ではないとわかっていても、なぜ逝ってしまったのですかと問いたくてたまらない。山崎先生は、どうぞ覧になっているだろうか。

山崎先生のご専門であった近世浄瑠璃や歌舞伎の世界では、よく人が死ぬ。しかし大切な人の死との向き合い方について、私はついに先生に伺わないままだった。巨大な宿題を遺して、先生は旅立っていかれた。この宿題から逃げるわけにはいかないが、あんまり難しいし何より悲しいですと、とめどなく泣き言が洩れるのである。

## 江戸時代へのタイムスリップ

二〇一〇年度卒業 安藤 三央

私が山崎ゆみ先生の研究室に在籍していたのは十年以上も前のことですが、先生の優しい声もお人柄も、愛情あふれるご指導も、今でも鮮明に思い出すことができます。あの頃も、今も、そしてこれからもずっと先生の存在は私の心の支えです。

「江戸時代へのタイムスリップ」―山崎先生の講義を一度でも受講したことがある人ならば、この言葉の意味がきつと分かることでしょう。近松門左衛門をこよなく愛し、近松の巧みな手法を「近松さんの『近松マジック』」と称し、親しみを込めて語る山崎先生の講義こそまさにマジック。私たちは魔法にかけられたように江戸時代へと誘われ、近世文学の世界に夢中になったものでした。その魔法は今でも解けることなく、先生のもとでの学びは、私の人生の大きなテーマとして心のなかを照らし続けてくれています。大学入学直後の桜が美しい季節に、国文学科の先輩方から山崎先生の講義の面白さを聞きました。

次に桜が咲く頃、待ちに待った山崎先生の講義が始まりました。山崎先生の手にかかれれば、何百年も昔の資料がつい先ほど書かれたのではないかと思うほど生き生きと蘇り、まるで当時の

人々の息遣いまで聞こえてくるかのよう。驚きと発見に満ちた毎回の講義は、一瞬で過ぎてしまう魔法の時間でした。

研究室選択について質問すると、最初の年は近松作品を通して研究の基礎を学ぶこと、四回生になれば各自扱うテーマは自由だから是非おいでということ、柔らかな関西弁で答えてくださいました。最後にひと言、笑顔で「でも厳しいから覚悟してな」と付け加えられたことも印象的でした。

東山で見る三度目の桜の季節に、晴れて山崎ゼミの一員になることができました。扱った『女殺油地獄』は思い出の近松作品となりました。そして早速、先生が仰った「厳しさ」の意味を知ることになりました。最初の発表者に対する質問は止まず、三週連続で追加資料を用意することになったのです。しかし、先生のレジュメにはいつも余白がないほどメモが書かれ、発表者に対して心からの労いの言葉を掛けられるのを聞いたときに、愛情いっぱいの母のようなお人柄を知りました。

また、先生の可愛らしい一面をゼミ生は皆知っています。楽しい場がお好きで、先生のお声掛けで何度もゼミコンパが開催されました。講義中の丁寧な言葉遣いが少し砕けた関西弁になり、姉のような立場で学生の会話に参加してくださいます。どこかで恋の話が始まると、いつの間にか駆けつけて、ぴったり隣につき熱

心に聞いておられるお姿は友人のよう。山崎先生は、私たちに  
とって尊敬する先生でありながら、母であり姉であり友人でもあ  
る、誰からも愛される存在です。

季節は巡り、大学生活最後の桜の季節になりました。卒業研究  
の悩みにはいつでも的確で具体的な助言をくださいました。事前  
にレジュメを提出すると、発表当日には既にぎっしりと先生のメ  
モが書かれていました。鋭いご指摘も、「よく調べたね」、「これ  
面白いなあ」と認めてくださる温かいお言葉も、研究を進めるう  
えでの大きな原動力になりました。山崎先生のおかげで研究の奥  
深さ、厳しさの先にある喜びを知ることができました。

卒業後一年目の春、卒業研究のテーマを教育分野から研究する  
ために進路を進めた私は、また京都女子大学で桜を見ることがで  
きました。優秀論文発表会という貴重な場に立つことができたの  
も、ひとえに山崎先生の愛情あふれるご指導あつてのこと、感謝  
の念は尽きません。笑顔で頷きながら発表を聞いてくださる先生  
のお姿に安心したものです。あの日もきつと、メモでレジュメの  
余白を埋めながら聞いてくださったのではないかなと想像しま  
す。お疲れ様会といつて食事に連れて行ってくださいました。そ  
のときいただいた忘れられないお言葉があります。「研究の根本  
的な姿勢は、どの分野でも揺るがないものやと思うから、どんな

に狭くても自分の研究の足場をしつかりと固めることが大事や  
ね。謙虚に、地道に、確実に研究を進めること。あなた自身が選  
んだ道なので、信念を貫いて進むんやで」。山崎先生御自身の研  
究に対する姿勢が反映されたお言葉に違いありません。あの日か  
ら今日に至るまで、私が研究で目指すべき姿勢としてずっと大切  
にしています。

桜を見る度に桜色が似合う山崎先生を想います。先生の教え  
は、先生から教わった人、先生が書かれた文章を通して、これか  
らもずっと生き続けます。そして近世文学を思うその度に、私は  
いつでも江戸時代へタイムスリップし、大好きな山崎先生にお会  
いすることができのです。山崎先生、心から尊敬しています。  
本当にありがとうございます。

### 山崎先生を偲んで

二〇二一年度卒業 上 村 栄美子

はじめに、山崎先生のご逝去にあたり心よりお悔やみ申し上げ  
ます。先生との思い出と感謝の気持ちをここに書かせていただ  
き、追悼とさせていただきます。

先生との最初の思い出は、一回生の時に参加した国文学会旅行  
です。当時仲良くなって間もない友人三人と参加し、今でも色ん

なことを鮮明に覚えているそんな思い出深い旅行です。一回生の参加者が私たちだけだったということもあり、先生は終始私たちが気にかけてくださいました。バスの中や夜ごはんの宴会、その後に関催された先生方のお部屋での二次会の時など様々な場面を感じておりました。一番思い出に残っているのがこの学会旅行のメインでもあった金刀比羅宮での事です。長い石段をヒールで登っていた私たちは、当時一回生で一番若かったのにも関わらず一番時間がかかってしまいました。そんな中、先生が半分登った辺りの石段で待っていてくださり、そこから御本宮までの道中、初めてプライベートなお話も含め色んな話を話しながら一緒に登らせていただきました。（私たちの歩くペースが遅かった為に登り切った後、即降りないといけなくなり、御本宮での滞在時間が短くなってしまいました。）せつかくの観光時間を削ってしまいが迷惑をお掛けしてしまいましたが、先生と初めて色んな話をしたことや、五人で一緒に撮った写真は大切な思い出のひとつです。またこれをきっかけに、講義の前後お話しすることができるようにになりました。

講義では私たち生徒の興味を引くようなテキスト選びをしてくださいました。当時使用していた「ハローキティの歌舞伎と日本舞踊」は見た目が可愛く、受講するに当たってモチベーションが

上がったことを覚えています。これは私だけが感じたことではなく、先日友人と連絡を取り合った際も話題に上りました。今でも部屋の本棚に置いてあり、たまに開いて読み返しています。実際の講義では先生が作成したレジュメも加わり、さらに説明が加わって授業そのものがとても楽しく、今思い返せばこの講義をきっかけにお芝居の楽しさや近世文学・文化に興味を持ち、三・四回生のゼミ選別に繋がっているのだと思います。

山崎先生のゼミは人気が高く、もちろん抽選もありましたが、最終的に二クラス設けられました。卒業論文を提出するまでに数えきれないほどのご指導ご鞭撻を頂きましたが、ここに三点挙げさせていただきます。

一つ目は卒業論文の題材選びです。絵本（草双紙）で書きたいと意気込んで臨んだものの、いざ題材を決めるとなるとなかなか響く作品に出合えずスタート時点に立つ以前の所で躓きました。扱いたいテーマや内容など凡そのイメージや研究したいことを伝えたところ、親身になって考えてくださり何作品か紹介して下さいました。さらに「日本古典文学全集」に目を通し、タイトルからでもいいので何作品かピックアップすることを勧めていただきました。その後無事「日本古典文学全集」よりこれと思える作品に出合うことができました。

二つ目は翻刻の際のアドバイスです。先生にもフォローを頂きながら崩し字の翻刻を進めていたものの、印刷の加減もあり見難い箇所が所々ありました。行き詰っている様子を見て、東京へ行く予定があることもご存知の上で、原本の複写を実際目にする為に国立国会図書館へ行くことを勧められました。今はデジタルコレクションがありインターネット上で拝見できますが、当時は存在しませんでした。今思い返せば、実際足を運んで目にすることでより作品に愛着も沸き、再奮起したように感じます。先生はそのことも加味して教示して下さいたのだと思います。

三つ目は丁寧かつ的確な参考資料のご明示です。レジュメを提出した際はもちろん、何気ない会話の中でも卒業論文の進捗状況を話すと、次に会った際に参考文献や理解を含めることができる資料を、当時使用していた出席カードの裏に書いて渡して下さいました。また印刷した資料を渡して下さいる事もございました。先日、在学当時いただいたカードに書いてくださった先生の肉筆を見て色んなことが蘇りました。二クラスゼミ生を抱えており、生徒が扱う作品やテーマも多岐に渡っていたかと思えます。そのような中で一人ひとりと丁寧な真摯に向き合ってくださいる先生のご指導方法に尽きました。私自身が社会人になり、より一層有難みを感じ、改めて尊敬の念を抱きました。

先生のおそばで学ばせていただいたのは人生の中では短い期間ではございますが、密度の濃い、そしてその後の人生にも色んなきっかけや励みを与えてくれる大切でかけがえのない時間でした。いつか再びお会い出来たらと思いつながら実行できなかったことは非常に悔やまれ残念ですが、これからも先生に教わった多くのことを大事にしていきたいと思えます。謹んで山崎先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

### 山崎先生との思い出

二〇一九年度 博士前期課程修了 松村美咲  
院生研究室で、またお会いするのを楽しみにしていますとお話しましたまま、その機会が訪れることがなくなってしまったとは、いまだに信じられない気持ちです。

山崎先生には、学部生の頃から授業やオープンキャンパスでのお世話になっていました。先生の授業レジュメには必ず学生へのメッセージが書いてあり、それを踏まえた授業初めのお話を聴くのが毎回楽しみでした。文学に関する展示会や書籍・漫画を案内してくださいったり、歌舞伎の貴重なお宝グッズを見せてくださったりと、文学や伝統芸能に広く興味・関心を持ち、楽しみながら学ぶことのできる工夫を常にしてくださいるよう思いま

す。先生の授業をきっかけに私も伝統芸能に興味湧き、何度か南座や国立文楽劇場に足を運び、その魅力を知ることができました。今でも六代目片岡愛之助さんを見るたびに山崎先生が頭に浮かび、目を輝かせて愛おしそうにお宝グッズのお話をされる姿が思い出されます。

大学院では、一回生の時に近世文学特論で指導いただきました。先生は私の不出来なレジュメを隅々まで読んだ的確にご指摘や問いかけをしてくださったり、関連する論文や書籍を取り寄せて紹介してくださったり、熱心にご指導くださいました。専門分野のゼミよりも発表が多く、調べ物や目を通す資料が多量で大変に感じることもありましたが、この授業で鍛えていただいたおかげで、分野を超えて幅広く捉えることの重要性を学び、突き詰めて検討したい課題を見つかることもできました。「発表の成果と一緒に論文としてまとめましょう」とお声がけいただいたことが光栄でとてもうれしく、いつかそのお約束を果たせるよう精進したいと思っております。

山崎先生は廊下などでふとお会いした時にもよく話しかけてくださり、就職活動や論文の状況をご心配くださっていました。その他、京都国立博物館の展示や京女周辺のお店にもお誘いいただき、大学院では授業以外でお話をする機会も増えました。

丁校舎近くの私房菜すみよしでお食事をご一緒した際、ある先生に就職活動に前向きになれないと相談したところ「それなら羊飼いなれ」とアドバイスいただいた、というお話をしたことがあります。私は笑い話としてお話しし、周りも笑ってくれている中、山崎先生だけが困ったようなお顔で、「羊飼って本当に大変なのよ。朝は早いし、たくさんの羊の世話をしなくてはならないし……。」と懇々と羊飼いの苦労について語り、真剣に私の将来を案じてくださったのです。予想外の反応に初めは戸惑い、不真面目な話に本気になってくださったことに対して申し訳ないような気持ちにもなりましたが、真摯に受け止めてくださったが故の、絶妙に逸れた受け答えが、いかにも大学教授らしく山崎先生らしいことがおかしく、笑いを堪えられませんでした。私の何気ない日常の小話にも耳を傾け、様々お気遣いくださった、山崎先生の誠実でやさしいお人柄を改めて感じた出来事として心に残っています。

私も教育業界に携わり、日々学生に接していますが、山崎先生が当たり前のようにしてくださった、どんなに忙しい時でも一人ひとりにしっかりと向き合い、丁寧に対応することの大切さと難しさを身にしみて感じています。先生にしていたいただいたこと、先生から学んだことを、文学研究にも日常にも活かしていきたいと

思います。

山崎先生、本当にありがとうございます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。先生の穏やかな、やさしい笑顔を忘れません。

### 山崎ゆみ先生のこと

博士前期課程二回生 宇野美亜

山崎先生にはじめてお会いしたのは三回生ゼミの初回授業でした。たまたま、J校舎一階の図書館分館だったスペースにできた新しい演習室が割り当てられていて、真新しい机や椅子に囲まれ、まるで新入生に戻ったかのような気持ちで受講していたことを思い出します。先生のゼミでは、小さな色紙を三つ折りか四つ折りにしたものに、ゼミ生それぞれが名前を記入し、毎回のゼミで机の上に置いて名札としていました。「好きに書いてよいですよ」とおっしゃるのをよいことに、名前の横に自作のキャラクター（トマトに顔と手足を描き加えたものです。トマト好きなもので……）を描いたところ、私以外のゼミ生は名前のみを書いていて焦ったのですが、先生は「かわいいですね」とこにこ微笑んで喜んでくださいました。そのときの表情は忘れることができません。

あれほど何かに打ち込んだ経験は、後にも先にもないのでな

いかと思うほどに、先生のご指導のもと研究に取り組んだ一年間は、楽しく、満たされていきました。学生との対話を大切に、愛情をもってご指導くださった先生でした。

先生との数少ないメールのやり取りの中で、特に記憶に残っていることがあります。それは、ゼミで扱っていた近松の世話物『心中天網島』の中の巻冒頭、治兵衛の妻おさんが末子に乳を与える場面に出てくる、「添乳<sup>そくち</sup>」という言葉の用例を集めていたとさきのことです。かなり用例の少ない言葉だということ、先生から同じ近松の時代物『天神記』第二幕にその用例があるということとを教えてくださいました。ところが、友人らと朗読しながら何度読み返しても一向に見つからないのです。私には頑固なところがあり、第一幕や第三幕に目を移すということをせず、一週間ほど粘ったのち、ようやく先生にメールでご相談しました。

私は私で、山崎先生がおっしゃることを信じたいと、頑なになっていましたし、先生も私を信頼して、自力で用例を見つけてくるまで見守っていてくださったのだと思います。結局は、その用例は第一幕に出てきていますとのお返事をいただいたのですが、はじめから全編通して見ていればと、意固地な自分の性格を恥ずかしく思いました。

先生は、山崎のメモの誤りで時間を奪うことになってしまっ

ごめんねと、メールでも、授業時に口頭でもおわびくださったのですが、私は「時間が奪われた」とは微塵も思いませんでした。思う存分時間をかけて作品と向き合えたことは得難い経験であり、用例以外にも、気づいた点はたくさんあったからです。何より、作品について友人とあれこれ語り合う、その時間こそが私には必要な時間なのだと思付かされたのです。このことを、当時の私は何とか先生にお伝えしようと、何度もメールを作り直したのですが、後から読み返すと、もつと言葉を尽くせなかったのかと申し訳なくります。いつか面と向かってじっくりお話する機会があれば、必ずお伝えしようと思っていました。私が四回生になって以降は一度もお目にかかれず、ご体調が優れないということは何っていましたので、こちらからご連絡を取ることも憚られて、そのまま突然のご訃報に接することになりました。

扉に貼られた演劇のポスターやメモ書きなどが残っている先生の研究室の前を通ると、今でもそこにいらつしやるような気がします。大学まで通う電車の中で、文楽劇場の広告を目にするたびに、先生のことを思い出して切なく、寂しくなります。もつとご指導を受けたかった、もつとご活躍してほしかった、もつといるんなお話をしたかったと、後悔ばかりが募ります。

でも、きつと一番悔しい思いをされたのは山崎先生です。今の

私にできることは、目の前の課題と向き合い研究の成果をあげることに、先生への感謝と思い出を胸にしつかりと前を向いて生きていくことです。それが先生の希望されていることだと思います。山崎先生、どうぞ、苦しみから解放された場所で、やすらかにお眠りください。

### 恩師 山崎先生を偲んで

二〇二一年度卒業 近 堂 渚  
皆さん、こんにちは。山崎です。

先生の授業はいつもその一言から始まりました。この文章を書くにあたり、今年の春に別れを告げた大学に思いを馳せています。

山崎先生との出会いは、水曜一限の国文学基礎講座です。毎週各分野の講義を聞きリレー講義。山崎先生の自己紹介が書かれたレジュメに目を通し驚いたのを今でも覚えています。まさかのイケメン好き。それもルビでイケメンでした。(当て字は忘れませんでした…)

一限はこの場でいうのは申し訳ない気持ちですが、大変眠い時間です。大学から近い場所に住んでいた私でも、寝坊していましたし、一限はできるだけ行きたくないです。そんな中、文楽の映

像など先生の趣味全開で行われた講義に私は夢中になりました。近世に興味がなかった私が、近世の研究をしようと思ったきっかけでした。

二回生になり、基礎演習と教養科目で、山崎先生の講義を受講しました。ここでは特に教養科目での話をします。教養科目では、豊国神社（国立博物館の近くにある）の話をしました。豊国祭礼図屏風に登場したタケノコ男、見てきました。「講義はライブ」とレジュメに書いていたこと、今でも覚えています。（オンラインも経験したからこそ、この言葉が身に染みんでいます。）

この講義のエピソードを取り上げたのは、私と松山さんが先生に勧められて、巻物を受講生の前で開いたからです。経緯を話すと、当時「一遍上人絵伝」が京都国立博物館に来ており、松山さんと私で行ってきました。そこで巻物体験を行っており、その体験談を先生に話したところ、まさかの受講生の前で披露することになりました。そのあと先生に感謝の言葉とともに手紙もいただきました。私にとって大切な山崎先生との思い出です。

本格的に専門分野に取り組み始めた三回生ゼミで、私たちはコロナに見舞われました。受講生同士が会えない、大学に行けない、未知のウイルスにより先が見えず不安でいっぱいでした。ゼミ発表はどうなるか周りと相談していたのを覚えています。山崎

ゼミは、事前にテーマを先生に知らせる必要があります、先生からのフィードバックを受けて資料作成に取り掛かります。今回もそのような方法で行われました。現在国立国会図書館はじめ多くの書物や資料はインターネットで閲覧できます。山崎先生はインターネット資料のあるサイトをまとめ、レジュメを提示してきました。前期を終えてから思ったことですが、本当に先生は真面目で、生徒のために行動する人だと思いました。後期も先生の講義はオンラインで、体調を心配しながら三回生は終わりました。

そんな中、四回生へ進級する際、先生の体調不良の連絡を受けました。連絡を受ける二週間前には、「皆さん頑張りましょう。」の文と共に、卒業論文に向けた資料リストが添付されており、山崎先生の体調があまり思わしくないのではないかと衝撃をうけたのを今でも覚えています。

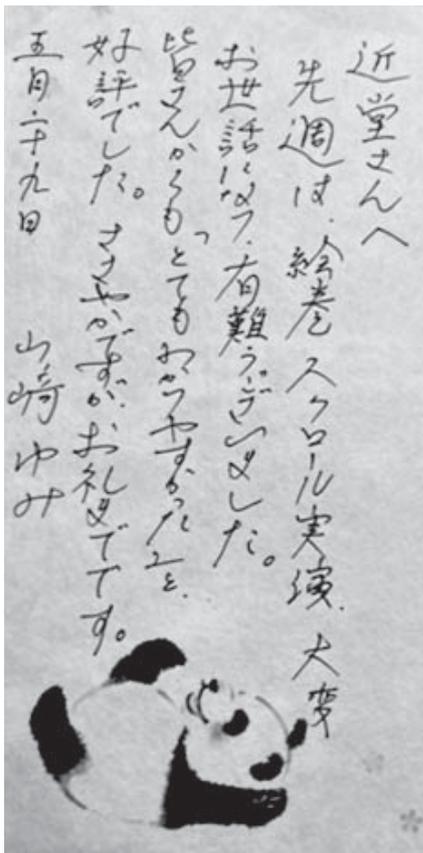
そこからは卒業論文、就活などあつという間の前期でした。後期が始まり、紅葉がピークを迎え、卒論提出締め切りまで残り三週間のころでした。私は永観堂で夜間拝観のバイトを行っていました。通知音が止まらないと思って、LINEを開いた時、先生の訃報を知りました。その日のことはあまり覚えていませんが、寒かった日だと思います。

先生のお葬式に行き、現実を目の当たりにしました。何かを話

すときに先生が過去の存在になっていたことが辛かったです。私  
だけではなく先生は多くの人に影響を与え、愛された方だったの  
だと改めて知る機会になりました。

そこからは、卒論に追われて山崎先生の研究室を通るたびに  
「ミッフィーの新しいグッズ買っていったな」や「パワーポイント  
習得するために研究室に本沢山置いてあったな」や峯村先生が授  
業で山崎先生への愛を語ったこと、懐かしいなと思い悲しい気持  
ちでした。

私は今社会人で、仕事に励んでいます。今でも大学のことを思  
い出し、楽しかったなと思っています。卒業してから思ったこと  
ですが、大学生は自分の好きなことを思いきり楽しむことができ  
る絶好の機会です。大学で先生に出会えて近世文学を学ぶことが



できて本当に幸せでした。書式は厳しかったし、テーマ設定に苦  
労したこともありましたが、その経験は卒論執筆はじめ、先生の  
愛だったのだと思っています。山崎先生へ、遠くからでもいいの  
で、私達のこと思い出してくれると嬉しいですよ。これまで本当に  
ありがとうございました。安らかに眠りください。

#### 優秀論文発表会（五月七日）

#### 『我身にたどる姫君』『音羽山』試論

―都を希求する山里の姫君のための舞台―

梶山 柚輝

#### 〈論文要旨〉

『我身にたどる姫君』は、自分の素姓が分からないという我身  
姫を中心として繰り広げられる全八巻の中世王朝物語である。こ  
の物語の始発部の舞台は、本文に「かくいふは、音羽山の麓な  
り。」「音羽の里」、「この山里」などと記されており、音羽の山  
里であることがわかる。「音羽山」は、歌枕としては有名である  
ものの、先行の物語には殆ど見受けられない地名であり、音羽山  
が舞台として設定されているのは物語として珍しいといえる。し

かし、このことについては殆ど研究がなされていない。唯一の先行研究である越田健介の論は、音羽の山里に我身姫の出生にまつわる噂話や琴の音が描かれていることを指摘し、それゆえに音羽山が舞台として選ばれたのだとする。だが、噂話や琴の音は都や他の場所にも溢れている音であるため、越田の見解は妥当だとはいえない。加えて、「音羽山」と称する山は山城に複数存在しており、『我身にたどる姫君』の音羽山は、先行研究においてその位置が明らかになっていないという問題点もある。したがって、『我身にたどる姫君』の音羽山がどこに位置する音羽山であるのかを明らかにし、音羽山がこの作品の舞台として設定された意味を検討する必要がある。

我身姫が暮らす音羽の山里の特徴があらわれた場面をとりあげてみると、音羽の山里は、都から近く、雪深く、人の訪れが少ない場所であることがうかがえる。音は、音羽の地に限らずどこにもある音のみが描かれる。一方、和歌に詠まれている音羽山や音羽の里は、「ほととぎす」、「秋風」、「擣衣」の音とともに詠まれることが多い。雪の歌は歌数が少なく、詠まれたとしても激しい雪ではなかったり、卯の花を雪に見立てたりする歌である。『我身にたどる姫君』の音羽の山里は、和歌に詠まれてきた音羽の地というよりは、『古今和歌集』以来描かれてきた、雪によつ

て一層孤絶する物寂しい「山里」のイメージを投影し、孤絶・寂寥の空間としての「山里」として描かれている。

続いて、『我身にたどる姫君』の音羽山がどこに位置する音羽山であるのかを検討する。山城には「音羽山」が、清水寺の背後の山、比叡山西坂本にある山、山科区と大津市の境にある山の三つあるとされる。『我身にたどる姫君』の音羽の山里は、人の訪れが少ない場所であるため、人々がこぞって参詣した清水寺の、その背後にある音羽山は候補から外すことができる。『我身にたどる姫君』の先行研究でも、比叡山西坂本説と山科説とで説が分かれている。物語冒頭をみると、音羽の山里で物思いに耽りながら外を眺める我身姫の場面であり、「空ゆく月を慕ふとしもあらねど、西の山の端、都の方には通はずしもあらぬ心の道さへ閉ぢつる心地して」という記述がある。この記述をもとに地理的な位置関係を東から順に示せば、音羽の山里―山―都である。この位置関係は、江戸時代の紀行文『藤波の記』の山科周辺地域について記した記事及び、保安年間から大永年間の山科の地理を伝える「山城国山科郷古図」にみることができる。また、「音羽」の記載がある資料を博搜してみても、山科以外の「音羽の里」の用例は一つもない。よって、『我身にたどる姫君』の音羽山は、山科の音羽山であるとわかる。

『我身にたどる姫君』の作者は、山科の音羽の山里にわざわざ雪を激しく降らせていたが、先行の物語に見受けられるような、もともと雪深い小野や吉野などの山里を舞台にすることもできたはずであり、また、宇治などの都に近い山里を舞台にして深雪を描くことも可能だったはずである。作者はなぜ山科の音羽の地を舞台に選んだのか。その理由を、①地理的に都からとても近い、②往來の激しい逢坂の関に隣接している、③都人に広く知られ、信仰されていたような寺院が見受けられない、④俗塵から遠く隔絶した宗教的世界が「鳥の音も聞こえぬ深山」という〈沈黙〉によつて表現されるのに対し、音羽山は〈音〉を連想させる地名である、という四点から、山科の音羽の地が俗世に近いたためだと考えた。

実際、『我身にたどる姫君』の音羽の山里も、我身姫の養育者である尼上が出家後もなお都人と親しく交流を保っていたり、寺院や僧庵などを一例も見出すことができず、尼上を除いては出家者の姿が殆ど描かれなかったりと、俗世から近く描かれている。それに対し、先行作品の山里は、都から距離が離れていたり、宗教色が強かったりと、俗世から隔絶した場所として描かれている。

『源氏物語』の宇治や小野の山里、『浜松中納言物語』の吉野の

山里に据えられた姫君たちの諸相をみてみると、出家を望んだり、山里での暮らしを続けようとしたりなど、俗世から距離を置く方向へ進もうとする。一方、山科の音羽の山里の我身姫は、始終、自分の出自や両親のことを考えている。作品冒頭で西の方角を眺めていたときには、西方極楽浄土を暗示する「空ゆく月」を「慕ふ」というわけでもなく、「西の山の端、都の方には通はずしもあらぬ」道を眺めていた。我身姫は、俗世である都を希求しているのである。作者は、山里に籠る姫君ではなく都へ出ていく姫君の物語を描くために、俗世に近い音羽の山里を舞台にしたのだと思われる。

『我身にたどる姫君』の作者は、我身姫の暮らす地に深く雪を降らせることで、雪によつて一層孤絶する物寂しい「山里」のイメージを投影し、自分の出自が分からず心細く暮らす山里の姫君という境遇を鮮烈に描き出す趣向を凝らした。しかし、作者が描きたいのは先行の物語に見られるような出家・隠遁する山里の姫君ではなく、都へと出ていく山里の姫君であった。そこで、姫君を都へと呼び戻しやすくするために、俗世に近い音羽山を舞台にした。俗世からの近さという観点でも、作者が想定していた音羽山の位置は、清水寺の背後でも、比叡山西坂本でもなく、山科でなければならぬ。始発部の舞台である山科の音羽山は、山

里の姫君が都へと戻って我が身をたどっていくという物語構想に適うように設定されたのだと考えられる。

〈在学生の皆さまへ〉

修士論文を書き上げてみて思ったのは、やっていることは卒業論文とたいして変わらないということです。勿論、学部より二年間多く勉強しているため、そのぶんの学修の成果や専門性などは求められます。しかし、それ以外は卒業論文と殆ど違いはありませんでした。論文執筆について伝えたいことは、卒業論文が優秀論文となった際に『女子大國文』第一六八号（二〇二二年一月）の彙報欄ですべて述べてしまい、修士論文を書いた今でも伝えたいことは変わらないので、そちらを乞う御覧。ここでは、学部生にとっては未知の世界であろう大学院について紹介することになります。

私が大学院進学を考えたのは、あろうことか四回生の十二月十八日、卒業論文を提出した日でした。卒業論文の副本は、提出期限前ならば学科のどの先生に出してもよいことになっていたのですが、折角だから自分のゼミの先生に出そうと坂本信道先生に提出しました。卒業論文を書いてみた感想を先生に求められ、「とても愉しかったです。だから、提出したら寂しくなってしまうし

た」と答えたのを覚えています。すると先生は、私の卒業論文のこと、文学研究のことなどを色々と言ったあと、人生に彷徨っていた一匹の羊に向き直って尋ねました。「で、進路、どうする？」と。私の答えは、先生のお話を聞いているうちに一つに定まっていません。斯くして私は、あと二ヶ月しかないと思いながら院試に向けて勉強をし、合格通知を得、頂いていた内定を辞退して、大学院に進学しました。

大学院は、そもそも少人数なので、学部の頃より先生方との距離が近くなります。授業は殆どがゼミのような演習形式であり、自分から主体的に調べていくことが格段に多くなります。発表に向けて色々調べていくなかで新しい知識や技能を身につけていくことは大変面白く、少人数ゆえに時間をかけて指導してもらいうこともでき、どの授業も毎時間とても愉しいものでした。修士論文のテーマは、指導教員の坂本先生ではなく、中島和歌子先生の演習を一对一で受けていて、中島先生と『我身にたどる姫君』について話をするなかで決まりました。指導教員以外の先生と自分の話をじっくりすることができるというのも、大学院の利点です。卒業論文を書いてみて研究に悦楽を覚えた人は、大学院に入院したらとても愉しく院生生活を送ることができるとは思いません。

教員免許を取得している場合は、大学院で新たに教職の授業を取ることもなく、修了と同時に一種免許状が専修免許状へと上進します。教育現場において、指導教科に関する高度な専門知識が求められている昨今、専修免許状を取得していることは強みになるでしょう。

教職に就かず一般企業に就職する場合、大学院進学は不利になるとインターネットなどではまことしやかに言われていますが、実際に就職活動をして一般企業に就職してみたところ、博士前期課程（修士課程）までならば不利になるということもありませんでした。寧ろ、学歴や、物事を見て分析する力などを評価してもらえることもありました。

二年間という短い時間とはいえ、社会に出るまでの期間を延長し、文学と、研究と、自由を与えられたときの自分自身とに存分に向き合う時間を得たことは、私にとって大いに意味のあるものでした。もつと研究をしてみたい人や、教職を考えている人は、大学院進学を視野に入れてみてほしいのかもしれない。

## 萬葉集二六九番歌考

― 第四句「所焼乍可将有」の訓読を中心に ―

新 谷 美 結

〈論文要旨〉

萬葉集の中には、現在でも訓読の確定しない歌が多く存在する。卒業論文で研究対象とした卷三・二六九番歌もそのうちの一首である。

阿倍女郎屋部坂歌一首

人 不 見 者 我 袖 用 手 将 隠 乎 所 烧 乍 可 将 有 不 服  
而 来 々

二六九番歌は訓読と歌意ともに注釈書間で意見が分かれている。訓読で意見が分かれているのは、第四・五句である。卒業論文では、第四句の訓読を中心に訓読・歌意の検討を行った。

第四句は「やけつつかあらむ」「やけつつかあるらむ」「もえつつかあらむ」の三つの説があるが、どの説に拠っても字余りとなる。しかし、当該句には母音「あ」が含まれており、この母音が字余りを許容する要因となり得る。三つの内どの説が妥当かを定めるため、九音句が許容させるかを考察する。萬葉集の万葉仮名表記巻で九音句が含まれるのは、三首のみである。

上野 伊香保の嶺ろに 降る雪の

行き過ぎかてぬ 妹が家のあたり (巻十四・三四二三)

石田野に 宿りする君 家人の

いづらと我を 問はばいかに言はむ (巻十五・三六八九)

針袋 取り上げ前に置き 返さへば

おのともおのや 裏を継ぎたり (巻十八・四二二九)

九音句の検討の前に、山口佳紀『万葉集字余りの研究』の見解によつて字余りと唱詠法の関係を確認する。山口は「第二・四句では単独母音を含みながらも字余りになっていな句が多い理由」について第一・三・結句は一続きに詠まれ第二・四句は二分して詠まれたからだと述べる。

以上を踏まえ、九音句の検討に入る。三四二三、三六八九番歌はともに結句が九音句である、句中に二カ所の母音連続がおきている。四一二九番歌は第二句に九音句である。よつて二分して詠まれていたと考えられ、「とりあげ」「まえにおき」のそれぞれの句中に二カ所の母音連続がある。以上より萬葉集の万葉仮名表記巻の中で九音句を含む三首は、唱詠法を踏まえると発音上は七音句となる。

二六九番歌の第四句「やけつつかあるらむ」は、単独母音を「あ」一字しか含まないため、二分して詠むと発音上八音句、一

続きで詠むと発音上九音句となる。しかし萬葉集の万葉仮名書巻には九音句で発音上九音句、八音句を含む歌は存在しない。また「つつかあるらむ」という表現は萬葉集では見られず「つつかあらむ」や似た表現の「つつやあらむ」は七首ある。字余りと表現の二点から第四句を「やけつつかあるらむ」と詠むとは考えづらい。

以上、第四句訓読の考察を行った。

① 仮名書き巻に母音連続のない、または母音連続一つの九音句はない。

② 「ツツ」「ルラ」を含む字余り句の例はあるが稀であり、母音連続を含む例が多い。

③ 「つつかあるらむ」は集中に見られず、「つつかあらむ」「つつやあらむ」は計七例ある。

右の三つの理由から、第四句は「やけつつかあらむ」または「もえつつかあらむ」で確定する。

次に「やけつつかあらむ」と「もえつつかあらむ」どちらが妥当かを検討上で重要になるのは「やけ」と「もえ」の違いである。注釈書での多数派は「やけ」であり、焼けているものは「山」や「坂」だと解釈している。少数派では、講談社『萬葉集』が「もゆ」と詠み「もゆ」の対象を「胸」としている。

「やく」「もゆ」の用例を確認すると、いずれにも「山」や「坂」を対象とした例が見られない。また「やけ」「もえ」の対象は第三句の「かくさむを」の対象にもなるが、「隠す」の用例にも人が「山」や「坂」を隠す例は見られない。以上を踏まえると、二六九番歌の「もえつつかあらむ」「やけつつかあらむ」が「山」や「坂」の事を詠っているとは考え難い。よって二六九番歌第四句は講談社『萬葉集』の自身の心の状況を表現したとする説を支持し、二六九番歌全体の意味としては相聞的歌と理解する。

ここまで、「やく」「もゆ」の違いに注目し考察したが、「やく」「もゆ」どちらの用例にも心や胸の内を詠った例があるため、まだ第四句の訓を確定することができない。そこで注目したいのが、「やく」はほとんどが自動詞「もゆ」はすべてが自動詞であるという点である。「もゆ」の対象が「胸」になっている用例を確認すると、「もゆ」はある感情が強くなった時に用いられている。一方、「やく」の対象が「胸」である用例は、比喻などの特殊な表現が用いられている。例えば、七五五番歌の結句では「切り焼くごとし」と比喻表現を用いている。また、一三三六番歌は「やく」が他の句と掛けられている。他の二首も物理的に自身を焼くという例や、自身の心と自身を切り離すと表現する例である。

ここで「やく」「もゆ」の比較の結論を述べると、「心がもえる」または「心に火がもえる」と詠い強い感情を表現する例は多くみられ、定着していたと窺える。一方「やく」を用いて「心がやる」または「心をやく」という表現で感情の起伏を表すことは比喻など特殊な表現方法の場合を除き、無い。二六九番歌は相聞的歌であり、恋情により強い感情が宿っていること踏まえると、第四句は「もゆ」を用い「もえつつかあらむ」とするのが妥当である。

第二六九番歌四句は、前章で述べた通り恋愛に関わる強い感情を表している。また、助動詞「む」が使われているため、この感情は作者のものではない。

二六九番歌が二七〇番歌からの羈旅歌群の前に配置され、歌中に「袖」という言葉が使われていることを踏まえると、この歌は旅に関わる相聞歌と見るのが自然である。また第一句に「人見ずは」とある事から、その恋愛は周りに知られてはいけなかったことが窺える。題詞の阿部郎女が誰なのかはわからないが、はっきり言えることはこの歌の作者が女性だということだ。また第五句「きにけり」とあることから、作者が家を去ったのちに屋部坂あたりで詠んだ歌であったことがわかる。恋愛が絡む羈旅歌の場合、男性が家を離れ女性が男性の帰りを待つというのが定石である。

る。しかし、逆に女性が家を離れる歌も巻十二・三二一三六のように、少ないが存在する。

二六九番歌は三二一三六番歌のように女性が家を離れる際に詠まれたと考えられる。「わがそでもちて かくさむを」は旅の歌で多くみられる、形見の衣の俗習を詠ったのであろう。

ここでの「かくさむ」は「包みたい」と訳する。萬葉集に見られる「かくす」には、隠し方が二種類ある。「モノや人の場所を変える方法」と「モノを覆いただけ見えなくする方法」である。二つ目の隠し方の際の「隠す」には何かでものを包むという意味合いを含んでいる。二六九番歌の「かくさむを」はまさにこの意味合いである。作者は自身の衣の袖で包む、つまり着せることを望んだのである。

これらの考察を踏まえ歌全体の解釈を示せば「人が見ていないならば私の袖であなたを包んだものを、あなたの心は今ももえつづけているだろうか、着せないで来たことだなあ。」となる。この解釈を踏まえると第五句は「きせずてきにけり」が妥当だとわかる。よって、二六九番歌の訓読は「ひとみずは わがそでもちて かくさむを もえつつかあらむ きせずてきにけり」である。

〈在学生の皆さまへ〉

この度論文要旨を執筆する機会をいただき、改めて卒業論文を読みながら学生時代を思い返しておりました。まだ卒業して数か月しか経っていませんが、既にずっと昔のことのように大学生活を懐かしく感じています。

社会人なりたての私が伝えたいことは一つ、学生の間になんか熱中して取り組んでください。熱中する対象は、スポーツやアニメ、卒論、何でもいいと思います。何かを突き詰める探求心は、時間にある程度自由の利く大学時代に伸ばしやすいと思います。探究心は何を勉強するにも役立ちますし、なにより何かに夢中になっていた経験は強く思い出に残ります。私は今その思い出に助けられています。

コロナに世界情勢に不安が尽きない状況だと思えますが、健康にだけは気を付けてお過ごしください。皆様が夢中になれる何かに出会えることを願っています。

### 歌枕「塩竈」の変遷

梅田文乃

〈論文要旨〉

歌枕「塩竈」は、現在の宮城県松島湾一帯に位置する陸奥国の

有名な歌枕である。海水を汲み入れて塩をつくるかまど「塩釜」を用いた製塩で栄え、古くから景勝の地として知られた。塩竈は『古今集』の時代では主に浦の情景に寂寥感を重ねて描かれることが多かったのに対し、『新古今集』以後の『最勝四天王院障子和歌』や『内裏名所百首』では春の歌題として採用されている。卒業論文では、『古今集』頃から『新古今集』以後の歌枕「塩竈」の詠まれ方の変遷について、塩竈詠を時系列に沿って整理し、考察した。

まず、塩竈詠の早い用例である『古今集』東歌の一〇八八、一〇八九番歌では、寂しげに舟が浮かんでいる様子や夫を待つ妻の心情が詠まれ、塩竈は寂寥感漂う海辺の場所として歌われている。

次に、左大臣・源融が京都に造営した大邸宅「河原院」について整理する。河原院の庭は塩竈の景を模して造られたことで知られる。『伊勢物語』の八一段には、河原院の雅遊において在原業平が塩竈の美しさを詠んだ歌や「わがみかど六十余国の中に、塩竈といふ所に似たるところなかりけり」と塩竈を絶賛した一節がある。陸奥に行ったことのある都人が極めて限られていた当時において、東下りで実際に陸奥に赴いてその景色を見た業平が言うこの言葉には説得力があると同時に、都の人々にさらに塩竈への

憧れを抱かせるものであつただろう。

その後、源融が亡くなったのちにも河原院の塩竈を詠んだ歌が見られる。融の死を嘆いた紀貫之の哀傷歌（『古今集』八五二）では、元来、陸奥の塩竈が持っていた寂寥感と、親しい人を亡くした喪失感とが合わさっている。その後、各時代で歌人が集った河原院は、宇多上皇や融の子孫へと伝領されながら、水害や焼失を経て記録からも姿を消す。陸奥の名所を模した雅で華やかな場所として憧れの的であつた河原院は、かつての栄華と主を失った喪失感漂う地ともなつた。

この喪失感を、陸奥の塩竈が本来持つ寂寥感と重ね合わせて詠んだのが中宮定子と紫式部である。『古今集』以後、『後撰集』から『千載集』の勅撰集には採られなかった「塩竈」詠であるが、『新古今集』では六首入集した。そのうちの二首が定子と紫式部の歌である。一七一七番の定子歌では、陸奥の塩竈が持つ寂寥感を引き継ぎながらも、主を亡くした河原院に影響を受け、塩竈に立つ藻塩焼く煙から火葬の煙を連想している。八二〇番の紫式部歌では、夫である藤原宣孝の死について詠んでおり、定子歌と同じく塩竈の煙から火葬の煙を連想している。この二首以降、塩竈と煙を詠み合わせた歌が数多く詠まれるようになる。特に、『新古今集』の塩竈詠六首のうち、定子以前の詠作を除く五首で煙が

詠まれていることから、定子と紫式部の歌の影響によって塩竈と煙の詠み合わせが定番として広まっていったと考えられる。

次に、煙との類似性から、春の代表的な歌語「霞」が連想され、塩竈とともに詠まれる例が見え始める。早い例としては源俊頼の「すまのうらにやくしほがまのけぶりこそはるにしらぬかすみなりけれ」(『詞花集』二七三)がある。塩竈の浦と同じく製塩で名高い須磨の浦が用いられているが、春の霞を引き合いに出して藻塩焼く塩釜の煙を詠んでおり、陸奥の塩竈詠と共通点がある。他にも塩竈と霞は多くの歌人に詠まれる。特に、藤原清輔は「海辺霞」の題で塩竈と霞を詠んでいる。『新古今集』の塩竈詠「見わたせば霞のうちもかすみけり煙たなびくしほがまのうら」(『新古今集』藤原家隆・一六一)の詞書にも「海辺霞」とある。この「海辺霞」という題は『後撰集』以後に流行した題で、勅撰集での初出は『新古今集』であることから、新古今時代に歌題として一定の認知を得ていた題であると考えられる。よって、家隆らは当時注目を集めていた「海辺霞」を詠むにあたり、俊頼をはじめとする先人らの歌から「海辺霞」と塩竈を結びつけ、塩竈に立つ霞を連想したのであろう。

徐々に春の性質を帯びてきた塩竈が、春の歌枕として確立したのが『最勝四天王院障子和歌』と『内裏名所百首』である。まず

承元二年に後鳥羽院が主催した『障子和歌』は、最勝四天王院の障子に描かれた名所四六カ所を題に一〇人の作者が詠じた。院の寿ぎが大きな目的の一つであり、名所ごとに著名な本歌に基づいて季節が定められた。この時点でまだ「塩竈を春で詠んだ著名な本歌」は見られなかったが、「塩竈浦」には春が定められ、最後に配された。『障子和歌』の塩竈詠一〇首では古来の陸奥の塩竈が持つ寂寥感は強調されず、穏やかな春の景が描かれた。特に、藤原定家歌と家隆歌は、『障子和歌』の「後鳥羽院とその治世の寿ぎ」という目的に則り、塩竈の景を絶賛した『伊勢物語』八一段を下敷きとした祝賀詠となっている。

『障子和歌』に採用された名所四六カ所中四四カ所を採用し、『障子和歌』を強く意識した催しである『内裏名所百首』(建保三年、順徳天皇主催)でも、塩竈は春に採用された。家隆は『名所百首』でも塩竈の景の美しさをこの上なく称賛している。また、『古今集』東歌一〇八八番や『伊勢物語』八一段の歌を本歌取りした歌もあり、『名所百首』の時代においてもこの二つの古典が強く意識されていたとわかる。

『新古今集』頃からの流れを受け、塩竈は春に採用された。加えて「東」と「春」が対応する五行思想も採用理由の一因になった。当時の都人は春は東から来ると認識していた。塩竈は東の果



## 『百人一首』小野小町歌の英訳について

— 小町説話と掛詞の訳出を中心に —

佐野 瑞

〈論文要旨〉

本論文では、『百人一首』における小野小町歌「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」が、どのように英訳されているのか、また英訳された和歌から原文の魅力をどこまで伝えられるのかを分析、検討する。

第一章において、当該歌の『百人一首』における解釈と、それに付随する小町の人物像と小町伝説についての先行研究の調査を行う。当該歌の初句・第二句「花の色はうつりにけりな」は、自然景物としての花の色の变化、小町自身的美貌の衰え、小町をもてはやしていた人々の心の移り変わりという三つの解釈を併せ持つ。小町の容色の衰え、人々の心の変化という二つの解釈は、『玉造小町壮衰書』を中心として広がった「小町落魄説話」「小町髑髏説話」「小町驕慢説話」等の「小町伝説」の要素を取り入れている。こういった「小町伝説」の要素を取り入れた当該歌の解釈は、室町時代後期の連歌師であった宗祇によって考案され、革新的な解釈として大きな広がりを見せた。第四句「わが身世にふ

る」の「世」の解釈においても「小町伝説」は取り入れられ、一般的な意味とは異なる、男女の交わりの意味を含むと解釈される。当該歌は、単なる叙景歌でなく、叙情的な要素を持った歌である。

第二章では、四種類の英訳を分析し、当該歌の特徴的な解釈をどのように表現しているのか、また和歌の特徴をどこまで反映できているのかを考察する。分析対象の英訳作品として、まずF・V・デイキンズの英訳の一八六五年版、一八六六年版の二作品を挙げた。デイキンズの二八六五年版は『百人一首』の英訳として世界初のものである。翌年に発表された一八六六年版は、一八六五年版に大きな改訂を加えたものであるが、この英訳は、後世の『百人一首』英訳に大きな影響を及ぼした。デイキンズの英訳は、両作品ともに「小町伝説」、特に「小町落魄説話」を大きく取り入れ、デイキンズ独自の解釈、工夫のもと訳を行っている。対して、掛詞「眺め」「長雨」の訳出は見られず、デイキンズが英訳において、和歌解釈を重要視していたことが伺えた。次に、ジョシユア・S・モストウ氏の英訳を取り上げた。モストウ氏は、学術的に和歌をはじめとする日本文化を研究している人物であり、氏の英訳にはそのこだわりが垣間見える。まず、モストウ氏の英訳本文はいたって簡潔にまとめられている。その本

文に小町の情感や「小町伝説」などを取り入れた特別な工夫は見られず、和歌原文をそのまま英訳にしている。しかし、掛詞「眺め」「長雨」の二つの意味を確実に訳すとともに、和歌の説明として「小町伝説」を踏まえた作者評、また当該歌における「花」の解釈の多様性を加えていることから、読者に原文の和歌の要素を漏れなく伝えようという意思が汲み取れる。

最後に、ピーター・J・マクミラン氏の英訳の分析を行った。マクミラン氏はアイルランド生まれの翻訳家であり、現在は日本に拠点を置き、その活動を精力的に行っている。氏は、英訳本文に「小町伝説」の要素を取り入れながらも、原文の和歌の形式から大きく外れず、英訳を行っていた。また、掛詞「眺め」「長雨」の二つの意味の訳出、加えて、日本の自然環境に馴染みのあるマクミラン氏ならではの表現の工夫も見られた。

四種類の英訳を分析、比較した結果、その程度に差はあるものの、様々な語や表現を用い、当該歌の解釈を踏まえた、またそれを投影するような訳が多く見られた。しかし、掛詞については、訳を行っているもの、片方のみを訳しているもの、両者を訳しているものとそれぞれであったが、日本語の音を活用した技法、というその特徴から他言語への翻訳の不可能性が見えた。当該歌は、訳者の多くの工夫や深い理解によって、宗祇を中心として考

案された深みのある解釈を失うことなく海外の読者に理解されるのである。

#### 〈卒論執筆体験記〉

私の卒論執筆は、三回生の二月ごろより始まりました。自分が卒業論文で扱いたいテーマ、またそれをどういった流れで論文に起こすのか、などを指導教官である小山先生と話し合いました。その後、三月中でテーマに関連する論文を集め、読み込むという作業を行いました。それまでも、講義のレポートなどで論文は何かか読んでいましたが、「自分が論文を書くのだ」という意識を持ったうえでこの作業は、その後の執筆イメージを形成するのにとても役立つと感じます。

四月以降に、本格的に卒論ゼミが始まりました。進捗状況を、先生に毎週報告するという形でゼミは進んでいきました。優秀論文発表会の際にも述べましたが、卒論執筆においては「孤立しない」ということが最も大事なことであると思います。その視点からも、毎週の進捗状況報告はよい影響がありました。これから卒論を執筆する皆さんにも、必ず一週間に一回は自分の状況を先生に伝えることをお勧めします。

私が、『百人一首』の英訳をテーマとして卒論執筆を進めてい

く中で、最も苦勞した点は、英語を読むという点でした。なんて単純な話だ！と思われるかもしれませんが、私にとってはそれが苦悶の種でした。私は国文学科の学生ですので、やはり英語で書かれた文章を即座に理解できるほどの英語力はありません。英訳本文を分析、理解することはもちろん、訳者のあとがきや参考文献を把握するにもかなりの時間を要しました。結局は友人や先生方に助けられながら、何とか読み解くことに成功したのですが、国文学科の学生が「英訳」に手を出すにはかなりの覚悟が必要であるということ学びました。

英語を読むということに併せて卒論執筆の手を止めたのは、先行研究がかなり少ないということでした。和歌の英訳についての研究はかなり少なく、加えて日本人、特に日本文学の研究者はほとんど見られないという状況であり、そもそもの英訳本文の文献を入手することにも苦勞しました。それも先生の助けを受け、なんとか参考文献を手に入れることができましたが、珍しいテーマで執筆を考えている方は、「図書館に全く文献がない」ことがあり得るという点、注意していただきたいと思います。

夏休み以降、実際に執筆に取り掛かってからは、やはり計画的にコツコツ進めるということが大切であると感じました。毎週、大学図書館が開いている月曜日から土曜日までは、朝九時ごろか

ら夕方十七時ごろまで図書館内で執筆に取り掛かり、図書館の閉まる日曜に息抜きを充てる、というスケジュールで約四か月を過ごしました。そして、毎週月曜にはゼミに出席し、それまでの一週間で仕上げた論文を印刷して先生に添削していただく、ということを行っていました。このスケジュールのおかげなのか、卒論提出の十二月半ばまで、自宅で徹夜をして卒論に取りかかるというようなことは一度もなく、睡眠時間八時間の実に健康的な生活の末、卒論の提出に至りました。アルバイトや就活、その他の課題など様々な予定があるかと思いますが、諦めずに時間を決めてコツコツと進めることが、長丁場になるであろう卒論執筆においては重要だと思えます。

一年間かけて、ひとつの事柄について研究する、学ぶという経験は、これから先の人生で滅多にないことだと思います。自分だけの得意分野を習得できる機会です。この貴重な機会を無駄にせず、必ず人生の糧になると信じて、論文執筆に向き合ってください。

## 変身譚における蛇の姿

— 女人化蛇説話を中心に —

酒 徳 優

〈論文要旨〉

本論文では人間が蛇に変身する作品群を取り扱っている。中でも女性が蛇に変身する説話を中心に研究を進め、当時の価値観や信仰を調査することを目的とした。

第一章では中古、中世の説話にある動物転生譚を動物別に分類、比較検討をしている。今回は人間が前世の罪により動物に生まれ変わるものを研究対象とした。中古、中世に成立した七つの説話集から動物転生譚を集め、動物の種類ごとに分類した結果、転生先として蛇が選ばれている説話が特に多いことが判明した。蛇は古代日本では信仰の対象であったが、次第に習性や生息地から死霊としてのイメージの方が強くなっていった。これにより蛇はただの畜生、むしろ忌避される存在となり、人間の罪の姿として描かれるようになっていった。

しかし、蛇をただ単純に罪の姿とまとめてしまうのは問題があると考えられる。例えば中世において蛇は依然として神聖さがある程度保っていた、と見ることも可能な点である。『本朝法華験記』

下巻ノ一一三、『今昔物語集』巻第十六ノ六では観音の化身として蛇が選ばれ、『宇治拾遺物語』巻第四ノ五には助けられた礼として裕福を授ける蛇が登場する。中世の縁起物語である『志度寺縁起』でも蛇は神聖なものとして語られている等、中古、中世の時代でも蛇は特別視されていたのでは、と推測する。また、蛇に転生した人間は他の動物と比べて多くの説話において成仏を迎えている点や、『今昔物語集』において法華経の功德を説いた話が集められた巻一三、一四に大半の蛇転生譚が収められている点など、蛇転生譚は他の動物転生譚とは異なる性格を持っている。蛇はもとより脱皮や冬眠をする動物であることから復活、転生を象徴する動物と考えられていた。以上から蛇に転生するとは、ただ単に罰を受けた姿ではなく、成仏を迎えるために一度姿を変えた神聖なものだと結論づけた。

第二章では女性と嫉妬、そして蛇との関係性について検討をしている。多くの作品で女性は嫉妬により蛇に変身、もしくは転生している。蛇はその習性などから執着や嫉妬の象徴として描かれている。その蛇と女性が結びついた理由のひとつとして仏教の渡来が関係している。仏教の教えのなかに女性は嫉妬深い存在である、と説くものがある。また女性の社会的地位の変動は嫉妬の感情に影響を与えていると考えることができ、そして女性の社会的

地位の低下は仏教が関係している。これらが原因で、中古から中世にかけて女性は嫉妬深く罪深い生き物だという考えが広がっていったと推測することができる。

また女性と蛇が結びついた他の理由に「童女成仏」の存在がある。これは罪深い女性を救うための思想である、「女人成仏」の根拠となる説話として語られていたものである。「童女成仏」そして「女人成仏」の教えは九世紀後半から貴族社会に流布し始め、次第に庶民の間にも広まっていった。その影響が見られるのが、女人化蛇説話の中でも有名な「道成寺伝承」の変化である。「道成寺伝承」は女人の執心を戒めることを目的に女人教戒の意図が色濃い作品である『磯崎』に引用されている。また『道成寺縁起絵巻』は女性の救済を語るテキストとしての役割がさらに付与されていると指摘されている。

こうした複数の理由により、蛇と女性が結び付けられたのだろうと推測した。

第三章では物語内の女性が蛇に変身する意味について論じている。ここでは女性の変身した蛇の姿は男性を連想させるものではないかと推測した。女人蛇体に男性的性格があると考え理由は三点ある。

まず、第二章でも触れた童女成仏という教えにおいて、ここで

示されているのは罪深い女性が成仏するためには男に変身する必要がある、というものである。童女成仏の話と重ねるならば蛇の姿は童女が変身した男と見ることができるとはならないだろうか。仏教において女性が成仏するためには男に一度なる必要があったのである。そして、これは第一章で結論づけた、人間が変身した蛇は成仏を迎えるために一度姿を変えた存在という考えと重ねることができると推測した。

次に蛇に変身した女性の攻撃性である。人が蛇に変身した説話を男女別に見比べると、男性が蛇に変身した説話に比べ、女性が蛇に変身した説話は怨みを抱いた相手に害をなす展開が多い。多くの作品の中で、女性が変身した蛇は攻撃的であるように書かれている。この物語の性格の違いには、当時の女性の地位の低さが関係していると考える。立場の低い存在が上位の存在を傷つける場面を描くことは、その怒りや怨みの強さを強調するための表現であり、また同時に、女性が蛇に変身するとは上位の存在である男性を傷つけることが可能になった姿、つまり男性的な力を持つたことを示すためではないだろうか。

最後に蛇信仰の存在である。古代日本の蛇信仰では蛇とは男性の象徴とされていた。『古事記』や『日本書紀』には蛇が男神として登場する話である「三輪山説話」が存在するが、中世時代の

作品である『沙石集』に同じ話型のもが記されており、蛇信仰は残っていることがうかがえる。また『今昔物語集』巻第二九ノ三九、『古今著聞集』巻第二〇ノ七二〇、『沙石集』巻第九ノ四などは「三輪山説話」を元にしていると考えられる説話であり、これらには雄の蛇が登場する。人間が変身する蛇は女性が多いが、蛇そのものは男性側の存在として描かれているのではないかと推測する。蛇信仰の薄れた中古、中世においても、蛇が男性の象徴である、という思想は残っていたと考える。

以上から、女人化蛇説話における蛇は男性の力を持っていたと考え、女性が変身した蛇には変成男子の思想が反映されているのではないかと結論づけた。

ここまでの検討から、蛇と女性は単純に嫉妬や執着の強さから同一視されるようになったのではなく、仏教の女性への穢れの意識と童女成仏の教え、そして変成男子の思想が大きく影響し、女人化蛇説話が生み出されていったと推測する。女人化蛇説話における蛇の姿は、女性の罪の姿のみではなく、神聖な姿としての役割も加えられたものだと考える。

#### 〈卒論執筆体験記〉

今回、卒業論文執筆にあたって私が一番身に染みて感じたこと

はメモの重要性です。

論文の執筆中、筆が止まることは何度もありました。その度に自分がこれまで貯めてきたメモを見返していました。そこにはこれまで調べてきた資料のまとめや引用文はもちろん、資料をまとめている時に抱いた違和感や疑問点、感想なども、小さなことでも自分の言葉でメモがあります。行き詰まってしまった場合には一度別の方向の視点から検討し直していました。どんなに小さなことでもひとつメモ書きを取っておくことは後の自分を助ける行為だと考えます。

また、論文執筆には様々な角度からの視点が必要になります。その時には自分が調査して得た知識、考えを文章にまとめあげなくては自分自身がどう調査をしていくといいのか分からなくなり、字に起こすことで自分の意見を整理することもできます。文章にしてみることで改めて違和感や課題に気づくこともできるでしょう。

ぜひ論文は「面白いと思ったもの」とことん調査する「もの」と思って取り組んでください。自分がしたいことに全力を尽くして完成させたという経験はきっとこの先の自信になると思います。

## 優秀論文発表会に参加して

三回生 坂野 来夢

三回生になり、そろそろ卒業論文について本格的に考えなければならぬ時期になったのだらうと思います。そうは言っても、まだ四回生になるまで一年あるからという甘い考えや、日々の授業の忙しさを言い訳にして、卒業論文のことからは目を背けていました。

そんな私にとって、優秀論文発表会の参加は、卒業論文に対しての自分の意識を変えるきっかけになりました。

先輩方の発表は難しいところもありましたが、どれも興味深いものでした。ですが、ただ研究内容を聞いてなるほど、と思っただけばかりもいられません。二回生、三回生の演習の発表資料作成にすら苦しい悲鳴を上げているような自分が、先輩方のように卒業論文を書き上げることができるのだろうか、という不安も芽生えました。しかし、発表後には私たち後輩へのアドバイスもあったので、不安に思うだけではなく、アドバイスをもとに頑張ろうという前向きな気持ちになることができました。

アドバイスの中で特に重要だと思ったことは、卒業論文作成のときに使う資料の管理です。必要な資料は全てコピーして、卒業

論文専用のファイルの一つにまとめることをしていたというお話もありました。実際に使用していたファイルも紹介してくださいましたが、膨大な量の資料に、卒業論文を書く上で資料集めがいかに大事なことを感じました。

また、調べたことをメモするときに、必ず参照元を控えておいたり、自分の感じたことも一緒にメモしたりすると良いというお話もありました。参照元を残しておかないと、参考文献を書いたるときに、どの資料を使ったのかをまた探す手間がかかることでした。調べたことに対して感じたことをメモすることは私自身やったことはほとんどないですが、卒業論文のテーマ決めなどのヒントになることもあるのだとわかりました。

卒業論文と並行して就活や実習、採用試験などをしなければならぬ中でのスケジュール管理についてもおっしゃっていました。早めに執筆に取りかかることや、上手く息抜きをしつつ、計画的に執筆を進めていくことが大事だと思いました。

その他にも様々なことを教えていただきました。先輩方のお話は、卒業論文執筆のみならず、今やっている演習などでも参考にできる部分が多かったです。四回生になって習慣をすぐに変えることは難しいでしょうから、卒業論文に向けて、今すぐ実践できそうな部分から取り入れてみたいです。

卒業生からお話を聴く機会は滅多にないことなので、参加することができて本当に良かったです。また来年も参加したいと思いません。

お忙しい中優秀論文発表会に参加してくださった先輩方、本当にありがとうございます。

### 優秀論文発表会印象記

三回生 中 西 ことの

私は今回、学会委員としてお声がけを頂き、五月七日の優秀論文発表会に参加しました。この行事があるということは、一回生の時から知っていましたが、実際に参加して、先輩方の発表をお聴きするのは、今年が初めてでした。通常であれば、発表の場へ赴き、肉声でお話を聴くものかもしれませんが、私が入学してから、毎年オンラインの形式で行われていると記憶しています。今年度もズームを使用し、発表者の方や先生方、私自身も、自宅や研究室など、各々の場所から参加する形での開催となりました。そのおかげか、私はまだ論文の執筆経験がほとんどないにも関わらず、なんだか「論文」というものを身近に感じ、あまり身構えることなく発表が始まるのを待っていたように思います。

卒業論文と修士論文を合わせ、五名の先輩方の発表を聴きまし

た。スピーチや質疑応答を通して、特に印象深く思ったのは、「論文の独自性」についてです。このことは特に、「塩竈」という歌枕を題材にされた論文を書かれた、梅田文乃さんの発表の際の質疑応答で話題となったことでした。梅田さんは、ご自身の論文の独自性はどこだと考えているか、と問われ、歌枕「塩竈」についての先行研究を読むと、(梅田さんの論文のように、)それについて文学史上の時代を追って網羅的に纏めたものはなかったため、その点が独自性だと考えている、といったふうに答えておられました。私はこれを聞き、論文において、「独自性」が一つの重要な要素だと気付かされました。

小野小町歌を英訳した作品を比較・検討することを題材とされた佐野瑞さんの論文は、発表を聞かれた先生方も「はじめて見る着眼点と分析だ」と仰っていたほど、独自性に長けた、興味深い研究でした。質疑応答の際には、英文学科の先生等にご相談されることもなく、ご自分の力でこの論文を書き上げられたということもお話されており、非常に感心しました。

また、修士論文を書かれた梶山柚輝さんは、論文執筆にあたって、実際に作品の舞台となった場所を訪れたと仰っていました。同じ作品を読み、分析したとしても、その場所に足を運んだ「実体験」は、人によって全く異なるものになると思いますから、こ

れも論文の独自性を追求するには重要な要素だと感じます。

発表後の体験談の場面では、それぞれ発表者の方が、どのような経緯を以てテーマを決められたのか、どのように資料を収集されたのか、といったことをお話されました。その十数分という短い時間のお話でも、同じ「論文を書く」という経験が、人によって全く異なっていると、とてもよくわかりました。しかし、どの方も「論文を書くことが楽しかった」と仰っており、その意欲的な研究が、今回の発表会にも選ばれるような、その人にしか書けない論文を生んだのだろう、と沁み入るように感じました。来年度は私自身が卒業論文を執筆することになると思いますが、一度きりの経験なので、興味を持ったことを突き詰めて、自分だけの研究ができるように努めたいと思っています。

二〇二二年度(令和三年度)論文題目

修士論文

詩語「雲林」の変遷

小堂 藤乃

『我身にたどる姫君』 「音羽山」 試論

梶山 柚輝

— 都を希求する山里の姫君のための舞台 —

『萬葉集』 卷七・一〇九四番歌訓読の再検討

小柳 萌子

— 「色服染」は「色取染」か —

萬葉集二六九番歌考

新谷 美結

卒業論文

上代

大伴家持のホトトギス詠 — 越中守時代を中心に —

山崎明日香

上代文学における文学的表現上の女性観

河田 果林

— 地方の女性を中心に —

『萬葉集』 七七三の訓釈を中心に — 庭に落る」もの

西村 鈴花

『萬葉集』の雲の用法 — 三九〇番歌を中心に —

吉田枝莉樺

久米禅師と石川郎女の贈答歌考

大澤ふびき

— 「弓」の表現を中心に —

『萬葉集』における「鹿」と「萩」の取り合わせの研究 — 何故「萩」は「鹿」の「妻」として詠まれたのか —

御手洗春香

『萬葉集』における漢語使用の要因

大津 瑞貴

— 戯歌との関連性、使用語彙の傾向から探る —

現代の『萬葉集』の解釈とかつての『萬葉集』の解釈の違い

大淵友希見

上代文学における髪飾りの用法

岡 瑞姫

— 「梅花の宴」を中心に —

「炎」に人麻呂が込めたもの

奥村 紫苑

— 歌群の考察に見えた四八番歌の構図から —

『萬葉集』 卷八・一五五二番歌「蟋蟀」考

田中 和

— 出典と恋歌説の検討を中心に —

歌語「あぢさゐ」の研究

中山 莉彩

— 『萬葉集』 七七三の訓釈を中心に —

中古

『蜻蛉日記』にみる引歌の否定表現

左海 澄佳

八代集における「涙」の比喻表現について

青木 千穂

「夢」と死の結びつき―八代集の哀傷歌を通して―

池田 智穂

歌枕「塩竈」の変遷

梅田 文乃

『源氏物語』における「紫」が持つ意味について

小川 栞奈

八代集における「袖」の表現について

笠原 海夕

―藤原定家「梅の花」歌を中心に―

八代集における「生物の涙」

河瀬 菜月

『百人一首』小野小町歌の英訳について

佐野 瑞

―小町説話と掛詞の訳出を中心に―

藤原公任の「つねなし」・無常についての考察

長山 遥香

毛利元就『春霞集』考

林 寧々

西行和歌の「枝折」の展開

東中 舞華

―「まだ見ぬ方の花を訪ねむ」を中心に―

藤原良経の『源氏物語』取りについて

丸賀 朱莉

藤原道信考

宮本 紗帆

『百人一首』行尊歌の「あはれ」について

吉村 莞奈

『落窪物語』一夫一妻―作者の理想の夫婦像―

河内 里歩

紫式部の「大宮」造型

田村 芽衣

『源氏物語』の色彩表現論

原 陽子

―服色からみる人間関係―

平安時代からみる女性の生き方

檜尾 真由

『源氏物語』現代語訳考

深澤すずな

『竹取物語』大伴御行と石上磨足の求婚譚

宮崎 琴子

―『宇津保物語』と比較して―

顔面考―中古文学における「顔」と「面」―

吉村 知桂

中世

『徒然草』第百五十四段

伊藤 咲

―「さも有りぬべき事」の真意―

「犬婿入り」説話の特異性

池田 美紅

―「猿婿入り」説話との比較と日本人の動物観―

『宇治拾遺物語』第九二話「五色鹿事」の独自性

石川 琴乃

生きながら鬼になった女

井原 菜緒

―『閑居友』下巻第三話と屋代本『平家剣巻上』の比較から―

『付喪神記』崇福寺本と諸本の異同について

入江 千優

―和歌を中心に―

『厳島本地』の構成―足引宮と登場人物の関係性から― 小原 早貴

『百鬼夜行絵巻』における仏教的受容 影浦 怜奈

『義経記』と『弁慶物語』における源義経と武蔵坊弁慶の

邂逅について 片野 愛香

『玉水物語』狐の末路 齋藤 沙羽

― 結末部分が作品にもたらす効果について― 酒徳 優

変身譚における蛇の姿― 女人化蛇説話を中心に― 竹山 友理

中世文学作品に化粧を取り入れる意義 西 彩香

御伽草子『浦島太郎』における「四方四季の庭」について 深田 麻莉

『鼠の草子』における鼠と猫の描かれ方について 藤本 紗瑛

「瘤取り」の物語に求められること 古典作品及び現代の子ども向け作品の比較― 宮本 優生

― 古典作品及び現代の子ども向け作品の比較― 走る式神― その背景を探る― 横石 裕佳

『今昔物語集』における「迷わし神」の基本的性格について 横田 陽南

『今昔物語集』巻十七第二十四話に関する考察 木下 七海

謡曲『大江山』の酒吞童子 酒吞童子の善悪について― 中崎あかり

― 酒吞童子の善悪について― 『萩大名』成立論― 庭をめぐる描写を中心に― 野口 実優

狂言と説話の関係について

鷺流と歌舞伎の関係性 溝上 歩生

― 近世初期と明治初期を中心に―

鬼狂言における鬼の特異性 渡邊 茉那

― 中世の文学作品と比較して―

### 近 世

木下長嘯子の歌風 牧野 萌

― 『萃白集』と『黄葉集』の重複歌の考察―

落語『あたま山』考 上西 晴子

狂歌論「箔の小袖に縄帯」考― 豊蔵坊信海を中心に― 小田 朋奈

『雨月物語』『青頭巾』考 川渕 奈緒

― 青衣が果たす役割について―

近松世話物における「涙」の役割 木村 麻衣

化物草双紙考 近堂 渚

― 近世の情勢からみる豆腐小僧の変遷と誕生―

北畠親顕考― 『親顕詠草』と『愚詠草』から― 齋藤 郁実

異類合戦黄表紙の作品特徴と擬人化効果 西藤 史

『心中天の網島』における阿呆役・三五郎の役割 月岡 千遥

― 道外方・金子吉左衛門との関わり―

遊女の恋の果て

寺尾 宥香

「たけくらべ」における子どもの特異性

瀧 智代

—『心中天の網島』遊女小春を中心に—

—『文芸倶楽部』掲載他作品の子どもとの比較—

『雨月物語』『浅茅が宿』の研究

得能菜々子

夢野久作「二重心臓」論—異性装と性の揺らぎ—

竹元菜々子

—宮木の人物像を中心として—

宮澤賢治「グスコブドリ」の伝記」論

納谷 玲子

近松門左衛門考—作品における親子関係—

中井 若菜

—イーハトーブのブドリの幸福観について—

『本朝桜陰比事』における西鶴の趣向

西上 明里

三浦哲郎の初期私小説における死生観を探る

野世溪優奈

近松世話物浄瑠璃における「面目」論

松本 明澄

「孤島の鬼」における鬼は誰であるか

藤田 春帆

「蛇性の姪」における豊雄の性格形成について

松本 芽依

江戸川乱歩「双生児」における双子の人物造型

古川 優奈

『葉隠』死生観の再検討

松山 鈴

『瓶詰地獄』兄妹関係の地獄

松岡 知緩

—奉公論を踏まえた「死ぬ事」の解釈について—

森鷗外「安井夫人」論—望みの対象—

南 ひより

谷崎潤一郎訳『源氏物語』改訳過程での変遷と、

## 近代

末摘花から見る谷崎の美について

今井明日香

泉鏡花「外科室」考—「宗教家」の解釈—

浅野 菜穂

—『陰翳礼讃』との比較を通して—

泉鏡花「夜行巡査」の人物造型

西村菜々美

## 漢文

芥川龍之介「歯車」論—暗合する事の暗号性—

奥村 美友

「銀河鉄道の夜」における青の色彩表現について

木村 佳凜

太宰治「おさん」における谷崎潤一郎「蓼喰ふ虫」からの影響

澤田明日香

—女性像を中心に—

『源氏物語』における『白氏文集』『傷宅』の引用

清水 智子

安部公房「鞆」における登場人物と鞆についての検討

引用文献からみる「茶酒論」と「酒茶論」の関係

杉山 嘉子

柴田 菜那

『文選』と『万葉集』における鴨の比較

矢城 歩

—鶯を含む—

## 国語学

日本語ラップ曲における押韻について

笠川菜美夏

歌詞におけるオノマトペ——米津玄師の楽曲における——

濱端 郁花

日本語の「行く／来る」とイタリア語の「andare／venire」

——原文と翻訳の対照を手がかりに——

山村 春香

現代のファッション雑誌におけるキャッチコピー——の特性について

山本 雪乃

歌謡曲からみる日本語の揺れの変遷

飯田 眞子

——ら抜き言葉・れ足す言葉・さ入れ言葉を中心に——

滋賀県西部・南部の方言について

石野 萌

——高校生へのアンケート調査より——

太平洋戦争における国策標語の変遷

川村 嶺実

——一九四〇年から一九四三年まで——

若者言葉「やばい」の使われ方と変遷

黒田 実玖

——一九八〇年代から二〇二〇年代の歌詞を中心にみる——

童謡における歌詞の変遷

河野 知里

——一九七〇年代・八〇年代、二〇一〇年代の比較——

マンガにおけるオノマトペの語形特徴

鈴木 紫音

——『鬼滅の刃』より——

## 流行歌の変遷

炭本 莉奈

——一九八〇年から二〇一九年の有線放送ランキングからみる——

あて字の分類とその認識について

谷口 莉子

——歌詞とアンケート調査による——

近代文学におけるオノマトペ

中井 彩霞

夢野久作氏の文体の特性

細川 梓

——文章心理学の観点から——

back number の歌詞の表現特性 恋愛に関する楽曲において

堀川寧々花

スポーツ中継における実況分析

的場 美夏

——ラジオとテレビの比較——

子どもの名付けにおける特徴

三角 麻依

——「赤ちゃんの名前ランキング」を中心に——

日本語におけるビジネス用語の特異性

山口 玲奈

流行歌の歌詞の名詞における社会の形容

鷺田 蛍奈

——明治から令和を対象に——

## 『女子大國文』投稿規定

### 一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

### 二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

### 三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

### 四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。
- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

### 五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。
- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個

人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

③ 原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

#### 六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

#### 七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

#### 八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

#### 九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

#### 十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

#### 十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

## 附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。